

みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第245号

発行者
茨城県学校長会
会長 鬼澤 真寿
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内
☎ 029-269-1300
FAX 029-269-1304

特集

特色ある学校経営 行財政・調査研究委員会の要望や取組み 先輩と語る会



自分・ひと・絆を大切にする

目次

- 表紙写真に寄せて…………… 1
- (特集1) 特色ある学校経営 2
- (特集2) 行財政・調査研究委員会
の要望や取組…………… 6
- 課題「授業を磨く教師」…………… 7
- (特集3) 先輩と語る会…………… 8
- 経営研究「創意工夫を生かした
特色ある教育課程」…………… 11
- 市町村教育委員会と学校長会
特別寄稿「少子化と
人生百年時代の教育」…………… 13
- 梅のかおり…………… 14
- ひばり…………… 15

神四「絆プロジェクト」

神栖・神栖第四中

大槻 豊

「絆プロジェクト」は、ステーション発表と物品販売、募金活動を中心としたお祭りのようなもので、今年で九回目になります。ステージ発表には、学区内の幼稚園、小学校、高等学校も参加します。

このイベントは東日本大震災を契機に生徒たちが考えついた被災地支援活動です。その時の収益や寄付金は、生徒たちの想いと一緒に被災地に送られました。

その時の精神はずっと受け継がれ、地域と共に歩み、進んで社会に貢献しようとする生徒が育っています。

特集 1

特色ある学校経営

地域とともにある学校づくりを 目指して

地域と、人と、つながろう

那珂・瓜連小 秋葉 悦子

一 はじめに

本校は、那珂市北西部に位置し、周辺には白鳥の飛来地として有名な古徳沼や八重桜が美しい静峰公園がある自然豊かな地区である。本校学区は、小・中各一校であり、「子供の心育ち・ふるさとづくりの応援団」という思いで学校への協力を惜しまない温かな地域である。

全校児童三二八名、学級数一五（特別支援三舎）。児童は明るく素直で、物事に一生懸命取り組んでいる。一方新しい環境で人間関係を築いていくことや自分の考えを表現することが苦手であることが課題となっている。そこで本校では、「つながる」をキーワードに、「地域を生かした教育」と「小中一貫教育」、「教科・領域」を結び付けた『キャリア教育物語』を柱に教育活動を行っている。

二 地域を生かした教育

瓜連地区ならではの教育活動は、地域のよさに触れ、ふるさとを誇りに思う心や地域の方々への感謝の気持ちを育むことができる。

(一) 伝統文化継承活動

「しづ織り」「瓜連お囃子」の伝統文化をクラブ活動で学び、地域で披露をする機会を設けている。

(二) 地域人材の活用

○学区内在住の書家による高学年への毛筆指導

○読み聞かせボランティア

二団体による継続的な読み聞かせをしていただいている。児童の読書活動への意欲付けや読解力向上の一助となっている。

○稲作体験学習

五年生は、水田を借用し農協や農家の方の協力のもと充実した体験学習となっている。キャリア教育の視点から、働く喜びについて話を聞く場を設定している。

○社会福祉施設との交流活動

六年生は、学区内にある社会福祉施設の運動会に参加したり、盲老人の方の話を聞いたりする活動を行っている。高齢者や障害のある人の理解を深められる貴重な活動である。

三 学校運営協議会との連携

学校と地域が連携した教育活動の支援を目的とする「学校運営協議会」が、平成二八年度に設置され、様々な支援をいただいている。地域の方々の子供や学校への思いが、安心して学習できる学校の実現につながっていることが感じられる。

(一) 学校運営協議会の組織

地域や小・中保護者代表者、学校（校長、教頭）、教育委員会担当者で構成されている。組織内の三つの部会が企画・運営を行い、地域力で学校を支援していただいている。教職員も積極的に参加し、地域との連携が進んでいる。

(二) 具体的な取組

○コーディネーター部会

命の読み聞かせや講演会放課後学習会（小学校）による学習支援。

○地域教育部会

防災体験アカデミー（四年生～七年生）学校と地域が連携した防災教育の実施。

○評価部会

九年間の児童生徒の成長が把握できるアンケートや評価の実施。

四 保幼小中一貫教育の推進

平成二七年度から那珂市小中一貫教育がスタートした。小・中一の強みを生かし、九年間の学びの連続を目指している。また、学区内の幼稚園・保育園との円滑な接続に向けた取組もさらに推進していく必要がある。

(一) 小中一貫教育

交流授業や小学校運動会での中学生ボランティア活動、六年生への小・中養護教諭合同授業など様々な交流活動を行っている。

学習・生活面実践項目

「白鳥スタイル」を策定中である。

(二) 幼保小連携

一年生との給食や授業で交流活動を行っている。スタートカリキュラムを有効活用し円滑な接続を推進したい。

五 おわりに

今後も、地域の教育力やつながりを生かした様々な教育活動に取り組み、健やかな児童の育成に全力で取り組んでいきたい。



生徒一人一人が輝き主役となれる 学校づくりを目指して

一人一人を活かし、伸ばす教育の実践

北茨城・中郷中 花園 浩

中郷中学校は、北茨城市の南部に位置する生徒数三七〇名、学級数一四学級(特支二学級含)の伝統校である。生徒は、素直でよく挨拶ができ、まじめな学校生活を送っている。

後援会、OB会による地域の学校支援体制が充実しており、部活動が盛んで、駅伝はここ数年、全国・関東大会にも出場している。しかし、反面、不登校と主体的な学習に課題があり、自己肯定感と学びに向かう力の育成が重要と考えた。そこで、昨年度から生徒一人一人に一層目を向け、一人一人を活かし、伸ばす教育に重点を置いた「生徒一人一人が輝き主役となれる学校づくり」に取り組んでいる。

一 学年・学級経営の充実
生徒を活かし、自己肯定感を育成する場の基盤は学級経営である。担任だけでなく、学年全職員で取り組むようにしている。

(一) QUTテストを活用した学級集団育成
温かな学級集団の育成と生徒個々への適切な支援を行うために、SCの助言を受けながら、積極

的な活用を進めている。
(二) よさを認め称賛する場の設定
帰りの会や掲示を活用して善行を賞賛、校内表彰も行う。教師も率先し、意欲を育てている。

(三) 生徒主体の学校行事の重視
スポーツ集会・運動会では、学級の目標に向けた自主的な取組を大事にし、朝練には教師、生徒が一緒に励む姿がある。

二 学力向上の取組
(一) 中郷スタイルによる授業実践
主体的・対話的で深い学びにつながる「見通し・学び合い・振り返り」を重視した本校独自の「中郷スタイル」による授業改善に取り組んでいる。

(二) 「タテ持ち」による教科指導
二学年のタテ持ちを行う。週時程に部員会を位置付け、切磋琢磨と活性化につなげている。

(三) 朝の活動の取組
始業前一五分の使い方

三 不登校ゼロを目指す取組
(一) 教職員の意識改革と校内支援体制の改善
不登校への対応には、教職員の意識を揃え、組織で粘り強く取り組むことが大切である。教員評価の組織目標に設定して取り組んでいる。「二年出さない、二年増やさない、三年改善する」を合い言葉に生徒の欠席に敏感になること、初期対応と生徒に響く指導に力を注いできた。また、外部講師を活用した校内研修会を開催し資質向上に努めてきた。

昨年是不登校数が半減となった。
(二) 教育支援室「なないろ」の設置と学びの保障
適応教室の役割と学びの場となる「なないろ」を設置した。不登校解消支援員による支援と、教科担当を配置した学習支援を行う。市適応教室にも教科担当を派遣し学習支援を行っている。

四 体力向上と部活動の取組
(一) 町内一周駅伝大会の開催
昭和二二年に始まり六八回となる伝統行事である。地区ごとにチームを編成して競争する。沿道では多くの方が声援を送る。体力とともに地域愛を育む。

(二) 伸びを実感させる部活動指導
生徒の心身の健全な成長と生徒個々を伸ばす部活動の教育効果は高い。複数顧問で効果的な活動を目指している。一方、本市の筑波大学と連携した部活動研修会を活用して

本校は、行方市の北西部に位置する全校生徒二九四名で、校舍からは霞ヶ浦と筑波山を一望できる水と緑豊かな景観に囲まれた中学校である。
生徒たちは落ち着いた学校生活を送っているものの、各種アンケート等の結果から考察すると、「主体性」「自己肯定感」「表現力」が課題であることが分かった。

生徒も教師も毎日「わくわくする学校」づくりを目指して

行方・玉造中 小野口 吉政

そこで昨年度から「自立貢献」人の役に立つ喜びを実感できる生徒の育成」を教育目標に掲げ、「生徒も教師も毎日わくわくする学校」を合い言葉に教育活動に取り組んでいる。
一 生徒が主体的に取り組み、「わかった」「できた」と実感できる授業づくり
一日の生活の大半を過ごす授業を充実させることが「わくわ



指導力向上にも努める。
本校の目指す教師像は「一人一人を大切に、最後まで関わる教師」である。「チーム中郷」として、生徒一人一人が輝けるよう、今後も全力を尽くしたい。

くする学校」につながると考え、日々授業改善に取り組んでいる。

(一)「玉中メソッド」による相互授業参観の充実

教員を五〜六人の四つのチームに分け、各チーム内で略案作成→授業参観→チーム協議を一月に一〜二回行う。チームには次世代のリーダー候補となるキャプテンを置き、相互授業参観にあたっては、チーム会議や協働での略案の作成、校内指導主事としての講評など、授業改善に向けて中心的な役割を担わせるようにしている。(玉中メソッド) 昨年度は相互授業参観を四〇回実施し、全職員二回授業研究を行った。

(二)他市の先進校との授業交流

新たな気付きを求め、他市の先進校との授業交流を行っている。昨年度は他市の小中学校二回、延べ二四人を派遣した。授業参観や他校の教員との交流を通して、互いに刺激を受けることで、その後の授業改善につながっている。

二 生徒一人一人の「居場所」と「絆」のある学級・学年づくり

教師による「居場所づくり」と、生徒による「絆づくり」を積極的に推し進めている。

(一)全学級複数担任制の実施

今年度から全学級に二人の担任を配置した。二人の担任が業務(出席確認、家庭訪問等)を役割分担し、学級経営にあたる。複数の目で学級の生徒一人一人を見ることができ、きめ細かな対応ができています。

(二)「話し合い」を基盤にした特別活動の充実

生徒一人一人の活躍できる場を学級・学年につくることで、居場所や生徒同士の絆がつけられると考える。そこで本校では朝から帰りまでの生活をグループ(四〜五人)単位で行っている。グループ内のことば「話し合い」を通して、折り合いを付け、合意形成をして自分たちで解決する習慣を身に付けさせていく。その発展として、学級活動や体育祭、文化祭等の学校行事の中で、一人一人の活動の場を設定し、よさを認め、自信をつけさせている。

三 教員の学校運営への参画意識を高める

今年度、これまでの校内プロジェクトチームから、自分たちで校内の課題を見付け、同じ課題を持つ同僚とチームを編

成し、課題解決に取り組んでいくワーキンググループに変更した。現在、働き方グループ、学び合いグループ、鍛え合いグループ、支え合いグループの四つのグループが存在し、校内の課題解決に向けて主体的に取り組んでいる。この取組を通して、自分たちの企画したことが

義務教育学校のよさを生かした地域と共にある学校づくり

つくば・秀峰筑波義務教育学校 松本 義明

一 はじめに

本校は、つくば市の北部に位置し、「筑波山地域ジオパーク」に認定されている自然豊かな地域にある。また、本校は、昨年度、旧筑波町の二つの中学校と七つの小学校が統合して開校した義務教育学校である。そのため、保護者や地域からの本校に対する期待は非常に大きい。そうしたことから、児童生徒、保護者及び地域から信頼される学校づくりが不可欠となる。

そこで、本校では、子供たちのよさを大切にしながら、『義務教育学校のよさを生かした地域と共にある学校づくり』を目指して、全職員で、よりよい学校づくりに取り組んでいる。

二 義務教育学校のよさを生かした小中一貫教育

つくば市の目指す小中一貫教

学校運営に反映されていくことを実感することで学校運営への参画意識を高めていく。

今後も生徒、教員一人一人がよさを進んで発揮し、「明日も学校へ行きたい」と思えるような学校の実現に向けて邁進していきたい。

育は、義務教育九年間を貫いて共通の「指導目標・指導内容・指導方法」が設定され、それらが教職員に共通理解され、さら

に、家庭・地域の協力のもとで実施される教育である。教職員の共通理解という点で、本校は、全職員が同じ校舎(同じ空間)で勤務しているため、学習面や生徒指導面で、情報交換がスムーズに行われ、小中一貫教育の推進がしやすい。また、子供たちも、一〜九年生が、同じ校舎(空間)で生活しているため、異学年の交流がしやすく、上級生の自己有用感や、下級生の上級生への憧れの気持ちがありやすい環境にある。

本校は、一四〇年以上続いた七つの小学校と、五〇年以上続いた二つの中学校の二中

七小が統合され、学区がつくば市の四分の一を占める広域な学校(通学バス二〇台利用)である。そこで、開校にあたり設置された二中七小の学校関係者と行政による「学校連絡協議会」の方針を大切にしながら、保護者や地域の声が反映されるようにPTA組織を構成(各地区代表としての副会長七名・地区委員会の充実等)し、学校づくりに取り組んでいる。また、よりよい学校づくりのためには、児童生徒や保護者、地域の方々から愛される学校づくりが必要となる。そのため、まず、児童生徒及び教職員が、学校のよさや地域のよさを知り、学校や地域が好きになることを目指している。

本校は、一四〇年以上続いた七つの小学校と、五〇年以上続いた二つの中学校の二中

七小が統合され、学区がつくば市の四分の一を占める広域な学校(通学バス二〇台利用)である。そこで、開校にあたり設置された二中七小の学校関係者と行政による「学校連絡協議会」の方針を大切にしながら、保護者や地域の声

が反映されるようにPTA組織を構成(各地区代表としての副会長七名・地区委員会の充実等)し、学校づくりに取り組んでいる。また、よりよい学校づくりのためには、児童生徒や保護者、地域の方々から愛される学校づくりが必要となる。そのため、まず、児童生徒及び教職員が、学校のよさや地域のよさを知り、学校や地域が好きになることを目指している。

四 本校の特色ある主な取組

ア 確かな学力の育成
○九年間の系統性を生かした教育課程の編成と実施
○共通の授業スタイルの定着(主体的・対話的で深い学



び・ユニバーサルデザインを意識した授業・ICTの利活用等)

○異学年交流による授業の推進
○ジオパークを教材化した「つくばスタイル科」の推進
〔秀峰筑波かるた〕、「筑波山検定」の作成と活用
○教科担任制の導入(五・六年イ豊かな心の育成)

○「異年齢クラスター制(縦割り班)」による特別活動の充実(運動会(一～四年)・体育祭(五～九年)・筑波山登山(五～七年)・クラスター集会(全年生))

○前期・中期・後期の各ブロックの明確な目標設定と指導の充実(つながりスタデイの実施)

○地区児童生徒会を活用した地域に根差した特別活動の推進(地区・地域行事への積極的参加)

○児童生徒会の活性化
○地域との連携の充実(幼保小連携・高校との連携(つくばね学・筑波高校))

五 おわりに
本校は、まだ開校して二年目ということもあり、人的・物的な課題等、多くの課題が残されている。また、開校一年目には気付かなかつた新たな課題も見つかってきている。さらなる課題解決と、課題発見を繰り返しながら、よりよ

い学校にしていければと思う。今後、子供たちが、「秀峰筑波義務教育学校を卒業してよかった。」と言えるような学校づくりを目指し、教職員がチームとして一体となり、保護者や地域の方々と協力し合い、地域と共に成長できる学校づくりを行っていききたい。

人間性豊かで、たくましく生きる子供(地域の宝)の育成

結城・江川南小 中澤 千佳子



本校は、結城市の南西部に位置する児童数七六名の小規模校である。明治七年の開校から一四五年を数え、歴史と伝統のある地域の学校として親しまれている。学校周辺には一面の畑が広がり、白菜、キャベツ、レタス等の葉物野菜の一大産地となっている。

この地域の特色を生かした栽培活動やボランティア活動などを保護者や地域との協働による教育活動として教育課程に位置付け、学校教育目標「人間性豊かで、たくましく生きる子供の育成」の具現化に向けた取組を推進している。

一 地域と共に歩む学校づくり
「グランドデザイン」にも掲げる「地域と共に歩む学校づくり」は本校の生命線である。学校教育目標を地域・保護者と共有する機会を大切に、学校の取組

を理解していただき、社会に開かれた教育課程の実現も図っていきたく考える。

毎年、地域の人的・物的資源を生かした教育活動として、野菜の栽培活動に取り組んでいる。

○枝豆栽培
一学期に実施する枝豆栽培では、小規模校の利点を生かし、全児童に役割を与え、主体的な活動となるようにしている。また、異学年児童や保護者との協働、栽培指導をしてくださる生産者の方々と

の交流等、多様な他者との関わりを大切に、自己有用感を育むとともに、地域に「成長していく児童の姿」を見ていただく機会としている。

また、この栽培活動は、学級菜園で栽培している他の植物との比較材料として、

理科や生活科の学習にも活用している。さらに、社会科学見学でお世話になる警察署をはじめ、地域の方々に贈呈することで、道徳教育との関連も図っている。

○白菜栽培

「これが江南の名物野菜」というテーマで半年間にわたり、総合的な学習の時間を軸にして取り組む白菜栽培は、教科等横断的な学習として一年間続いている本校の特色ある活動である。

市場の協力を得て、収穫した白菜を出荷し、北海道から沖縄まで、国内各地で販売している。「セリ」も見学し、地域の産業について実感的に学ぶ機会としている。

さらに、全国にわたる購入者を調べたり、整理したりする活動では、社会科や算数科との学習内容の関連を図っている。収穫を祝う「白菜パーティー」の実施においては、国語科の学習を生かし、招待状やお礼の手紙を書いたり、家庭科の学習を生かして献立を考えたりしている。

「どのように学ぶか」に視点を当て、重点的に指導すべきことを共有し、協力体制を整え、カリキュラム・マネジメントの推進も図っている。

二 保護者との連携による学校改善

本校には、校歌と並び「江川南小PTAの歌」がある。

「元気に育つ子等のため みんなの力よせあつて 愛の灯ともすPTA。家にはたらく父母の道 教え導く師の道も 子どもの心すこやかに豊かな夢をやどらせる 願いは一つPTA。」

また、学校の施設や通学路等の改善について、行政機関に陳情する伝統行事「笛会」は、PTAの主催により、大正一三年から続いている。今年度も、この活動により、通学路の改善が実現した。

学校のことを我がこととして考え、活動する精神が受け継がれており、「保護者との連携」は、本校の強みである。喫緊の課題である「働き方改革」は、「児童と向き合う時間の確保」「安全確保」につながるという考えを共有し、推進に向けて検討をしている。下校時刻、運動会、学校徴収金の徴収方法の見直し等について、学校の考えを発信するとともに意見を聴取したり、相談したりする場を大切にしていくところである。

学校のニーズを保護者・地域に伝えること、また保護者・地域の思いや願いを理解し、その実現に向けて努力すること等、双方向の密な連携・協力を、「地域の宝」である児童を大切に育む教育を推進していききたい。

特集 2

行財政・調査研究
委員会の要望や取組

令和二年度「教育行政に関する
要望」―その経過と概要―

行財政委員長 海野 隆



県教育庁への要望書の提出

◇要望の概要

I 国への要望

- 義務教育標準法の改正による教職員定数の改善
- 多様な教育課題に対応するための加配定数の増

- 小学校第二学年以降への「三・五入学級」の拡充、早期実現

II 県への要望

- 一 きめ細かで質の高い教育を子供たちに保障するために
- (一) 少人数学級並びに少人数指導にかかわること

- ① 「楽しく学ぶ学級づくり事業（小三～六）」の継続

- ② 「中学校生活充実支援事業（中一～三）」の継続

- ③ 「安定した学級・良好な人間関係・教師のきめ細かな指導」が可能となる少人数指導のための加配措置の拡充

- ④ 特別支援教育コーディネーター加配の拡充

- (二) 確かな学力の育成にかかわること

- ① 小・中・義務教育学校に

- おける学びの広場サポートプラン事業の継続
- ② 学びの広場サポートプラン事業の実施内容・実施方法の弾力化
- (三) 新学習指導要領の実施にかかわること
- ① 「特別の教科 道徳」に関する研修の充実
- ② 小学校における外国語及び外国語活動に関する研修の充実
- ③ 小学校におけるプログラミング教育に関する研修の充実

二 学校組織の充実と活性化を図るために

- (一) 新規採用にかかわること
- ① 新規採用者の計画的・継続的な確保と教員志願者を増やす取組の工夫
- ② 優秀な人材を確保するための採用方法の工夫
- (二) 人事による活性化にかかわること
- ① 専門的・補助的スタッフ

- ① 新規採用にかかわること
- ② 優秀な人材を確保するための採用方法の工夫
- (二) 人事による活性化にかかわること
- ① 専門的・補助的スタッフ

- ② 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立
- (三) 教職員の育成にかかわること
- ① 若手教員研修制度の見直し
- ② 特別支援免許状取得の促進

- ③ 勤務時間の適正化に関する共同研究の継続（以下略）
- ④ 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立
- (三) 教職員の育成にかかわること
- ① 若手教員研修制度の見直し
- ② 特別支援免許状取得の促進

- ③ 勤務時間の適正化に関する共同研究の継続（以下略）
- ④ 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立
- (三) 教職員の育成にかかわること
- ① 若手教員研修制度の見直し
- ② 特別支援免許状取得の促進

- ③ 勤務時間の適正化に関する共同研究の継続（以下略）
- ④ 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立
- (三) 教職員の育成にかかわること
- ① 若手教員研修制度の見直し
- ② 特別支援免許状取得の促進

- ③ 勤務時間の適正化に関する共同研究の継続（以下略）
- ④ 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立
- (三) 教職員の育成にかかわること
- ① 若手教員研修制度の見直し
- ② 特別支援免許状取得の促進

- ③ 勤務時間の適正化に関する共同研究の継続（以下略）
- ④ 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立
- (三) 教職員の育成にかかわること
- ① 若手教員研修制度の見直し
- ② 特別支援免許状取得の促進

の配置の拡充

② 常勤・非常勤講師の確保による欠員の解消

三 充実した教職生活の実現のために

(一) 管理職の待遇改善にかかわること（以下略）

(二) 教職員の働き方改革の推進と健康管理にかかわること

① 勤務時間の適正化に関する共同研究の継続（以下略）

② 働き方改革にかかわる県教委と県学校長会との協働体制の確立

(三) 教職員の育成にかかわること

① 若手教員研修制度の見直し

② 特別支援免許状取得の促進

四 本県教育の一層の充実・発展を図るための市町村当局への助言について

(以下略)

調査研究委員会の取組

調査研究委員長 久地岡 啓一郎

I 活動のねらい

本県学校教育の現状や直面している課題等の調査を通して、県学校長会が、その解決

に向けた提言・活動等を行うための資料を提供するとともに、各学校の特色ある教育活動の推進の一助とする。

◇要望書作成・要望行動の経過

六月一七日

全小中学校への調査

六月二六日

アンケート調査結果の集約、分析、考察

七月二日・十一日

県学校長会役員等との検討

七月二六日

常任評議員研修会において要望書案の説明・協議

八月五日

要望書に関する義務教育課との事前協議

八月二八日

要望書に関する義務教育課との事前協議

課題



授業を磨く教師

県学校長会副会長 田沼 政志
(筑西・下館小)

新学習指導要領の全面実施が迫っている中、県内の学校では、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けて様々な取組が行われています。

その中で、取組の鍵を握るのが、「各教科等の特質に応じた見方・考え方」です。授業改善の重点は、「各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」と示されています。この「各教科等の特質に応じた見方・考え方」や「各教科等の特質に応じた見方・考え方」を働かせることについては、各教科等の学習指導要領解説の中で明記されています。

文部科学省は、全国の小学校に向けてこの二年間の移行期間において、「各教科等の特質に応じた見方・考え方が、各小学校に十分周知されている」と言いがたい。」と発表しました。

各小学校はいかがでしょうか。

本題に入ります。

私は前任校で三年間、国語の研究指定を受けていました。そして現任校でも二年間、国語の研究指定を受けています。国語科に限らず、移行期間の終わりを間近に感じ、いささか焦りが出てきたところで、課題は、授業の質を向上させることです。

授業を改善していく上でポイントになるのは、子供たちのどんな力を育てたいのかをしつかり意識することでした。より質の高い授業を追求していくと、教科の枠を超えることや、他の教科の力を借りる必要性が出てくることに先生たちは気付きます。

ここで次のステップに入ります。学校全体の方向性を定め、それぞれが役割を果たす段階です。授業の質を向上させるために、どこを目指しているのかを全員が認識することが大切です。

授業の質を上げるといふことは当然子供たちの力を育てていくことと綿密にかかわり、ここで教育目標や教育課程につながります。

「主体的・対話的で深い学び」の土台は何か、について先生たちと話し合いました。結

論は、道徳科の充実と特別活動（特に学級活動・話し合い活動）を掲げました。各教科等を貫くものは、学ぶことに興味・関心を持ち、自己の活動を振り返りながら改善することです。「自尊感情」や「自己有用感」といった自分から自分への評価だけではなく、自分の行ったことを他人から認めてもらった、自分が相手にした働き掛けを相手から評価されたという、相手の存在感が前提となつて生まれてくる感情です。次に、「温かい学級」が学習や学校の基盤であり、学級担任の営みは大切であるということ。児童・生徒との信頼関係を築く上で一番大切なのは、教師の愛情です。相手の身になって考え、相手のよさを見付けようと努める学級、互いに協力し合い、自分の力を学級全体のために役立てようとする学級。道徳科や特別活動の学びこそが、「主体的・対話的で深い学び」の実現のための土台になっています。

文部科学省が作成した解説「総則編」を中心として、各教科等の解説を読み返す。その理念の中でも重視すべきものは、「子供たち主体の能動的な学習」の構築です。子供が本気になり、真剣に主体的に学ぶことで、実際の社会の中で活用できる能力を獲得できるようにすることが授業研究のポイントになります。

具体的活動と進捗状況
三つの部会を設定して、大きく、次の四つの活動を行っている。

一 今日的課題に関する調査と研究（第一部会）
○第三期中期ビジョンで目指している「働き方改革の実現」に向けて、各学校内の体制づくりや取組、教員の勤務に対する意識等に関する調査を全小・中・義務教育学校の学校長と抽出校の教諭を対象に実施する。その調査結果を分析して、働き方改革の実現へ向けて、今後の校長会や各学校の取組への一助とする。

II 具体的活動と進捗状況

三つの部会を設定して、大きく、次の四つの活動を行っている。

一 今日的課題に関する調査と研究（第一部会）

○第三期中期ビジョンで目指している「働き方改革の実現」に向けて、各学校内の体制づくりや取組、教員の勤務に対する意識等に関する調査を全小・中・義務教育学校の学校長と抽出校の教諭を対象に実施する。その調査結果を分析して、働き方改革の実現へ向けて、今後の校長会や各学校の取組への一助とする。

二 進捗状況

○進捗状況
九月 調査依頼
一〇月 集約
一〇・十一月 集計・考察

三 特色ある教育活動の調査（第二部会）

○各小・中・義務教育学校の研究・研修の充実発展に資することを目的に調査を実施し、結果を県学校長会webページに掲載する。

四 進捗状況

○進捗状況
六月十二日 調査依頼
七月五日 集約
七月 集計・webページ作成
八月 webページ掲載

III 勤務実態（時間）に関する調査（第三部会）

○全ての公立小・中・義務教育・特別支援学校を対象に超過勤務時間等を調査する。

○進捗状況

九月 調査依頼
一〇月 調査
十一月九日 集約
十一月 集計・考察

四 全連小・全日中の調査及び編集等への協力

○全連小各種委員会の調査協力
次の九つの調査について、各ブロック毎に分担しながら実施する。

- ・標準法 ・教員養成
- ・給与年金 ・健全育成
- ・教育改革 ・教育課程
- ・現職教育 ・特別支援教育
- ・施設設備教材等

○全日中「全国中学校校便覧」の掲載校を各ブロック毎に一校ずつ推薦する。

- ・掲載校は次の五校
 - ・水戸市立第二中学校
 - ・行方市立麻生中学校
 - ・石岡市立石岡中学校
 - ・坂東市立猿島中学校
 - ・日立市立中里中学校
- ・推薦にあたっては、第二部会の特色ある教育活動に関する調査を参考にします。

特集3

先輩と語る会

八月五日

教育フジざいばらき

はじめに

今年度は、一三名の先輩校長の皆様に...



※ゴシックは先輩校長

【第一分代会】

▽先輩方が現職であった頃の教員が社会的にどのよう捉えられていたのか...

○昭和三十三年に赴任した当時は「先生さま」と呼ばれ、家庭内の相談をされるなど信頼もされ、地域や保護者に大事にされ

環境に恵まれていた。

○戦中に生まれ育った。中学生のとき、懇談会で褒められたことが教員になることに影響があった。高度経済成長期であつたため、三年生の時に企業からの誘いもあつたが、昭和四〇年教育学部を卒業し、教育実習で楽しいと感じ、指導教員の影響もあり教員になった。当時の先輩方が前向きに活躍し、任されたときの楽しさが思い出される。

○もっと先見性をもって取り組めばよかつたと思つている。退職校長会として県への要望事項を取りまとめ、要望していきたい。教員の魅力を改善するためには定数と処遇の改善が必要だ。社会に対して問題点を明らかにしていくことが大切ではないか。

○なぜ目指そうとしないのか。魅力に欠けるのであろう。多忙な毎日ではあるが、夢と希望のある学校にするのは校長の務めでもある。行政も学校も今できることを本気で取り組んでいくことが必要である。

○大学二年生の時に友達に誘われてとつた教職だったが、教育実習で奥深さを知つた。目指す理由の中によい先生との出会い

が大きい。学校が生き生きしている姿を見せ、子供とよい関わりができる環境をつくっていくことが大切だ。

▽若手教員の意欲をどのように喚起しているか。

・様々なことに挑戦してきた楽しさを若者たちに伝えたい。外部にも発信し、大学生や教員を目指す人たちにも伝えたい。若手の教員には、もっと面白く、楽しく新しいことをやれるよう指導していく。

・自分たちが熱い思いで取り組んできたことを引き継いでいくことが大切である。

・校長が教育実習に積極的に関わり、自分の経験などの話をしていく。講師を依頼するなど地元に戻ってくるよう促している。学校は特色を出し、教員と子供たちが充実感をもって取り組むことで、子供たちが教員を目指す機会にしたい。「働き方改革」を推進し、職員の負担感の軽減を進めている。

・教育実習での楽しい体験を通して、感性の部分を学ばせたい。また、悩みをもっている若手から聞き取りをして、一人一人に合った研修をつくっている。授業づくりなどの工夫で宿題を減らすなど、負担感を少なくする対応をしている。市によるスクールサポーター制度により、教員の業務軽減につながっている。

きとしていふことが大切である。課題のある教員でも、仕事を任せ、抜けがあれば全職員で補完し合い、やりたいことができる体制づくりをしている。

・人となりが見られる職業である。学力をつけるためにはAIでも可能であろうが、心を育てる場としての学校が重要な位置になつている。その場にいるという楽しさ、人の人生にかかわれることのよさを職員や子供たちへ伝えていくことが校長の役割である。自分自身が楽しめるアイデアを見出すなど校長としての力の見せどころではないか。

▽希望をもって教員になつた若者のやる気、意欲をどう上げるか。

・三年目の教員がやめなくなつた。しかし、前年度の研究授業での経験、部活動での充実感、中学三年を担任した経験からやり続けることになつた。

○精神論で片付けてはいけません。教育行政に携わつた経験から、やはり定数改善、処遇改善が必要である。

いかに心配である。学校を取り巻く環境が変化している。保護者・地域が学校の味方・応援団となるような状況を退職校長会が関係諸団体へはたらきかけ、もう一度教員をやりたいと思える現職の先生を増やしていきたい。

○待遇の改善だけでは思うように伸びない。待遇改善以前にトラブルなどで敬遠する若者が多いのではないか。人的なゆとりが必要であることを明確にしていくことが必要である。学校の厳しい現状を発信しつつ、楽しく、充実感、満足感のある状況をいかに多く創り出すか。校長が何をやらねばならないか、深く考えなければならぬ。

○学校だけでなく国全体の視野から教育を考える必要がある。

○時代の流れに本気になつて対応し、校長が方向性を明確にし、教員が子供と接する時間を大切にして取り組んでほしい。

第一分代会

○先輩出席者

- 吉田 仁様 鬼澤 明様
梅原 勤様 佐藤 和夫様
坂場 克身様
・学校長会出席者
鬼澤 真寿 小野瀬繁子
西連寺 有 河嶋 賢一
長谷川 聡 矢口 典子
萩谷 智徳 中田 和彦
高橋 長男

【第二分散会】

▽「若者が教員を目指したくなる魅力ある学校づくり」について、先輩方から、ご示唆をいただければと思います。

○学校の存在理由は、「学力の向上と人間性の涵養」だということを頭にに入れて、この二つに全力投球すれば、教員を目指す若者がたくさん出てくる。

○自分たちがよい先生になつて、こんな先生になりたいと思うような子供をつくること。

今、少ないのは、子供に見えてくる教師像が、そんなに魅力的ではないということである。校長が自由度をどれだけ教員に与えられるか、それが先生を生き生きさせることにつながると思う。その姿を見ている子供たちが、自分も先生になろうという気持ちになると感じる。

○「学力の向上と人間性の涵養」に、先生のおもしろさがつまっている。一人一人の子供の心に目を向けると、目の色が変わり、伸びる場面が見られる。そして、子供が感動することを実感できる。そういうところを感じられると、先生っていいな、と思う学生が増えていくと思う。

○「子供の成長を見られるのが魅力だ」という学生がかなり多い。子供が変わった場面に出会い、教員の魅力を味わうことが、

教員生活の中で何度かあった。そういう場面が実際に学校にはあるんだということを知りたい。

○「働き方改革」は喫緊の課題である。表面的に四五時間というガイドラインを守ること、学生が本心に教員を目指すのかというところ、それだけではない。今の若者が学校に何を期待しているのか、若い先生の率直なところを本心にモニターしているのかというところ、弱いと思う。若者の視点からも考えながら、学校経営を組み立てることに踏み込んでいく必要がある。

○例えば、帰りの会で、それぞれの先生が自分のアイディアで、五分間のコーナーを作って一年間やってみるといようなオリジナルティが発揮できる場面が少なくなっている。これも経営の一つとして、教員を目指すのであれば、響くのではないかとと思う。自分たちが見てきた学校とは変わっているんだという姿を学生にも伝えて、学生が目指していけるようにしていければいい。

○型にはめることが多すぎることで、我々の仕事の魅力度が減っている、と感じる。教員は口ポットの発達には負けない仕事の筆頭にあるのではないかとということ、自信をもって後輩に伝えた

り、子供たちにも魅力的な仕事だということを伝えたりする場面があってもよい。

○学校が追い込まれる場面というのは、自殺であったり、クレーマー的な保護者の存在であったり、どうにも対応できない場面である。先生方に緊張を強い、非常に大きな要素である。校長会として、専門家を増やす、弁護士も関われるようにするなど、制度的なものを要望していく。温かく国が面倒見てくれるとか、県が面倒見てくれるという雰囲気が出てくれば心配しなくて済むと思う。

○時間だけ短くして管理しても、働き方改革にはならない。心の自由を与えることが疲労感をなくし、それを見た子供たちがよい先生になっていく、これは長期的な計画である。



・「自由度」が一番大事である。とにかくやりたいと思つたことを失敗を怖れずにやるうと、だめだったらすぐにやり直そうと言っている。もう一つは、「同僚性」である。本校では、「先生もキラリ」というポストを作つて、職員室だよりを出している。退勤時に、教員の良いところを書いてポストに入れてから帰るといふことをやっている。翌日、自分の名前が載っているかなと楽しみにしている教員が多い。お互いに、よいところを認め合おうということをやっている。

・「人間性の涵養」については、私たち教師自身がモデルになつていかないと、目の前の子供たちは感動を得ない、我々は鏡であると感じている。喜怒哀楽を共にできる体験活動をするので、あこがれの部分は染みていくと感じている。

・若い先生たちが一生懸命やっていることをしっかり認めてもらうような環境づくりが必要と感じている。管理職として学校現場の実態をしっかりとPTAにも伝えながら理解を得て、若い教員を育てていく必要があると感じている。先輩が教えるだけではなく、保護者の方も支えていくという体制づくりが必要で

あると感じている。

○当たり前だと思つていることを見直す必要があると感じている。忙しさから解放する仕組みをたくさんつくることも必要である。

○一〇年前、どうやって教員に夢中で仕事に向かわせるか、と考えたのが三五人学級で、実現したのが全連小だった。

○教育にとって一番大事なのは、「師弟和熟」。教師をやつていてよかったと思う。子供の成長が見られる「師弟和熟」が教育の基本だということを押さえておかないといけないと思う。

○待遇改善を図ろう。学校長会として、楽しく勤められるような環境づくりをする、それが学校長会である。

・校長会としても、働き方改革として、様々な事業の見直しを進めているところである。

第二分散会

- 先輩出席者
 - 中川 實様 鯨岡 武様
 - 土門 能夫様 砂川 洋一様
 - 小島 睦様
- ・学校長会出席者
 - 塚本 秀樹 安原 優
 - 海老原和夫 稲川 善成
 - 根本政世 古橋 賢治
 - 春原 孝政 関根 紀夫

【第三分散会】

▽「若者が教員を目指したくなく魅力ある学校づくり」について、先輩方からご意見を伺いたいと思います。

○「若者が教員を目指す」というのは、保護者や子供に「先生はいいなあ」と思ってもらえることと捉えることができる。そのため、学校が元氣、先生方が元氣であることが大事である。

○教育学部の学生に現在関わっているが、教員採用試験を受験する学生は約七割弱である。志望動機を聞いてみると、「自分が教わった先生のようになりたから。」とほとんどの学生が答える。教員はブラックだなどとよく言われるが、教員を希望する人数は一定数いる。魅力ある学校づくりの前に、大事なものは、一人一人の先生が、あんな先生になりたいと思える魅力ある先生であることである。そして「あんな校長先生、あんな教頭先生になってみたい。」と若手が思える理想像を部下に示しているのかも重要である。

○学生たちの声を聞くと、勤務時間のことや保護者対応などで教員に対して負のイメージをもっており、これからの若者が、数ある職種からあえて教員を選ぶというのは難しいと感じる。

こうした若い人たちに教員を選んでもらえるようにするには、小中学校の段階で、先生方がやりがいをもちながら楽しく仕事をし、仲間の雰囲気もいい、そんな働きの様子を見せてやる必要があるであろう。

○教育には口マンがある。学校を見たり、聞いたりするところからよさが伝わってくる。教員になった自分には、打てば響く子供たちと、その子供たちが伸びていく姿が嬉しかった。教員という職業を通して、子供たちとの密接なつながりをもてるようになってきたことが楽しくもあった。退職した今も教え子たちとの付き合いが多く、自分自身が生き生きと過ごすことができている。

・小学校一年の時の担任の先生がずっと頭に残っている。今の時代でも、休み時間に遊ぶ姿は素敵だし、先生方にはそんな時間を作ってほしい。本校には新採教員が二名おり、授業を参観すると、褒めてもらうのがうれしいとのことであった。

・先日、人工知能の話について聞く機会があった。作業が人から機械に置き換わりつつある時代にあって、教員は、ロボットではやっていけない職業と感じる。専門職としての魅力を同時に発信していきたい。

・単純に労働条件が厳しいという情報が世間一般に流れてしまっている。月四五時間、年間三六〇時間の範囲内に超過分を入れようと思ってもどうにもならない。部活動については、中学校長として、年中、保護者からの声があり苦しんでいる部分もある。様々な教員がしなければいけない仕事と、任せられる仕事の仕分けをしていく必要がある。校長としては、今の教員が校長を目指してくるようにならないといけないという反省もある。教え子、保護者が「学校っていいよね。」と感じてくれるようにしていくことが大切である。

・先生方が生き生きしている姿を見せることが一番といえるが、現実的には様々な要因から難しい面もある。教員は一生懸命頑張っており、行政を含めた支援体制をお願いしたい。

○多忙感の話や、魅力ある学校づくりの話など話題にしているが、本質的なことに学校が如何に取り組んでいけるのかが大切である。校長が学校の実態の全てを把握していなければ改善はできない。トップが判断をしてあげることが大事といえる。この一番の困難な時代の中では、校長が陣頭指揮に立たなければいけない。教頭に任せているだ

けでは、改革は進まない。雑誌に「新採教員をやめさせない」という特集が組まれる時代になってきた。教育実習で挫折する学生もいる。なりたいたいと思う気持ちを心のよりどころに進んでいってほしいと願う。今は新採、講師が増えてきており、やめないよう支援をしている。学校は助け合える、支え合える、チームワークのある職場と思ってもらえるとよい。



・若手は増えてきている。保護者が不安感をもったり、担任のいい話を家庭でしなかつたりするなどの話を耳にする。負のスパイラルである。家で担任を褒めてほしい旨を保護者には伝えていく。全身全霊をかけて取り組める職業だと言えようようになっていけるといいと思う。

○教職員は研究職でもある。一般の会社のような時間制限ではないことも分かってきている。しかし、働き方改革を進めないと社会から認められなくなってしまう。今が改革のチャンスでもある。試行してためならもどせばいい。

第三分散会

○先輩出席者

中井川正次様 水越 和夫様
鈴木 一司様 東小川昌夫様
伴 敦夫様

・学校長会出席者

土田十司作 田沼 政志
皆川 澄雄 海野 隆
大島 靖子 飯島 誠
片岡 寿夫 安島 可子
宮内 芳孝

おわりに

先輩の皆様が学校教育に対する熱い想いを感じさせてくださる熱い想いを感じました。これからのける会となりました。これからの校長のあるべき姿についても多くの示唆を与えていただきまし。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

経営研究

創意工夫を生かした 特色ある教育課程

地域と共にある学校づくりを 目指した教育活動の展開

常陸大宮・緒川小 仲田 修

本校は、常陸大宮市の北西部に位置し、学区には清流緒川が流れ、校内には、地域との連携のもとで整備された学校林「吹上の丘」や美しい花が咲き誇る「学校花壇」、野菜がたわわに実る「栽培園」などが配置されている。本市の郷育立市の理念のもと、恵まれた学習環境を生かしながら、学校・家庭・地域が一体となって、教育活動を行っている。

一 特色ある取組

(一)理科教育における取組

本校では、長年にわたって理科教育を推進している。その発展学習として、平成二四年度より、親子で科学に親しむことを目的に「サイエンス緒川小まつり」を、三年ごとに実施している。昨年は、県生涯学習センター「おもしろ理科先生」派遣を活用し、専門的外部講師を五人招いて実施した。親子で「紙とんぼ」や「万華鏡」、「トロンボー



鮭の稚魚の観察

ン」などを作って楽しく活動した。そして、全校児童で地球温暖化についての講演を聞き、自分たちができることについて考える機会とした。また、三年生が総合的な学習の中で、「鮭の放流」活動を実施している。卵の観察から始まり、卵の孵化、稚魚の成育、緒川への放流といった一連の活動を行っている。当初は、地元漁業組合の指導を受けていたが、現在は三年生が単独で行っており、さらには、活動の成果を保護者や全校児童にも伝える活動を

行っている。

(二)学校支援事業の活用

市の支援事業も、今年で四年目を迎えた。地域コーディネーターを中心に、読み聞かせ・花壇整備・家庭科や書写の授業支援・水泳学習の補助指導などを行っている。地域ボランティアの方々の温かな協力のもと、充実した活動

が展開されている。

二 成果と今後の課題

平成三〇年度いばらき理科教育振興事業の理科教育優秀校に選ばれ、児童の理科に対する興味・関心が高まったことが、何よりの成果である。今後も、地域と連携・協力して、理科教育を推進し、特色ある教育課程の編成に努めていきたい。

郷土理解を育む教育活動の展開

高萩・東小 根本 幸恵

全校児童一八六名の本校は、高萩海岸から約三〇〇mに位置し、朝夕を波音とともに迎える。また、高萩中学校は徒歩十分程度の近距離にあり、東幼稚園は校舎内に併設されているという環境を教育活動に反映している。

一 特色ある取組

(一)海浜持久走大会(全校)

海岸での持久走大会は、児童の祖父母の代から続いている。応援の保護者は自分たちの時代の海岸持久走に思いを馳せる。事前には、児童が協力して海岸清掃を行っている。

(二)砂の造形(全校・隔年)

保護者協力のもと、高萩海岸に大きな砂のミニユメントを学級ごとに造形する。

活発な話し合いを通して、設

計図や工程を計画し、協働して作品を完成させている。

(三)はまぎくの植栽(第四学年)

総合的な学習の時間に、郷土の植物について課題解決学習に取り組んでいる。地域サポーターから、はまぎくの挿し芽について学び、海岸に植栽する。継続題材なので、海岸一帯にはまぎくが咲き乱れ、郷里を思う心情も児童によく根付いている。

(四)避難訓練等(全校)

地域防災関係者やPTAの協力のもと、津波想定や登校途中の地震の避難訓練等、主体的に考え行動する避難訓練を年間計画に基づいて実施している。また、毎月、KYT週間を設定し、様々な場面を

想定した危機回避能力を育成している。

(五)幼小中連携

幼小中連携のもと、系統的な教育目標の設定や遊び・行事・学習等の交流を計画・実施している。年長者に憧れ、年少者を慈しむ態度が育ち、その関係は郷土愛の一端を担うことになる。

二 成果と課題

郷土の誇りや想いは、子供たちが強く生き抜いていく根幹となる。児童の主体性を縦糸に、地域の実態(強みや弱み)・人とのつながりを横糸に郷土教育を工夫改善して展開し、教育課程の充実を図ってきた。今後はコミュニティ・スクール等の運用を通して、多くの目と手が児童の教育に携われるよう図っていくことが課題である。



学校の内外環境の強みを生かした 児童を見守る仕組みづくり

石岡・小椋小 井上 勉

本校は、旧八郷町の南西に位置し、朝日トンネルを学区にもち生活圏が土浦市やつくば市になる地域である。辻のいちご園地も抱え、筑波大との連携でいちごでつくった絵の具を活用した体験活動も行っている。全校児童は九六名で三世帯同居も珍しくない。平成一六年に朝日小学校と統合されたことから学区が非常に広く、登下校の安全が最重要課題となっている。また、少人数であるが故の問題もあり児童一人一人の見守りを重視すべき学校であるともいえる。

一 特色ある取組

(一)地域の三輪（公民館・区長会・青少年を育てる会）との連携

公民館は、本校の隣にあり多くの会合が開かれている。そこで、地域へのアプローチが容易にできるといふ強みを生かして様々な連携をさせていただいている。

特に、児童の登下校に関わる見守りについては、区長会・青少年を育てる会等が中心となり交通指導・ながら見守りにあたってくださっている。

また、運動会や文化祭を公民館との共催で行うことで地域に身近な学校といった感覚をもっていたいただき、更に児童を見守る外的環境を整えている。

(二)教科担任制の導入

平成三〇年度に理科教科担任制モデル校に指定され学力診断テストでも好成绩をあげることができた。

そこで、今年度は理科・体育・図工・音楽・家庭で教科担任制を組んでいる。

目的は、児童一人一人の学力・技能向上にあるが、何より「多くの教師で児童を見守



地域学習「ふるさと学習」1・2年生の様子

る」体制づくりが構築されているということである。ほとんどの授業で授業者と担任とのTTTを組むことができるため、学力面でのアプローチや見守りの視点からも児童への配慮が十分に行き届く。月に数回の「子どもを語る会」で

気付き考える健康教育活動の展開 （歯と口の健康づくりを通して）

猿島・五霞東小 倉橋 孝一

本校は、関東平野のほぼ中央、茨城県西南端に位置し、江戸川・利根川などに四方を囲まれ、交通の主要な拠点として発展を遂げた地域にあり、児童数二二三名の中規模校である。

五霞町は、小学校二校・中学校一校が、関係機関と連携しながら義務教育九年間を見通す系統的な健康教育に取り組んでいる。

一 組織体制

五霞町の学校教育基本目標を基に、学校歯科医を中心に、小中学校間の連携を密に図っている。九年間の継続した系統的な歯科健康保健実施計画を作成して、歯・口の健康づくりを実施している。

二 活動の実践

(一)合同学校保健委員会開催
小中連携で三校合同の学校

情報を共有することにより全職員で児童を見守る体制をより充実させている。

二 成果と課題

安心・安全の視点から見守り体制が十分に整備することができた。今後、継続させていくことが課題となる。

三 成果と課題

・ 家庭・地域へ便りの発信等
・ 環境衛生・健康相談
・ 歯科検診時の個別指導
・ 親子歯みがき教室
・ いい歯のオリエンタリング

保健委員会を開催している。共通の学校三師、関係機関、家庭・地域が一体となって、五霞町の子の健康について有意義な話し合いを行っている。

今後も生涯にわたって自身の健康に気付き考え、それを生活に生かせるようにサポートしていきたい。そのためには、学校、家庭・地域、関係機関とさらに連携を深め、協力しながら五霞町の子の健康のために、さらに啓発に努めていきたい。

(二)専門医による指導
学校歯科医と歯科衛生士による継続した歯科保健指導を実施している。適切な歯磨きの仕方やデンタルフロスの使い方などを学び、健康に関心をもち、生活に生かす実践力が高められている。

(三)五霞町健康福祉まつりへの参加
歯科医師会による歯科相談・フッ素添付のコーナーと連携し、歯科保健活動を地域に発信している。歯・口の健康について呼びかけ、室内展示ブースで取組を発表してい



五霞町健康福祉まつりへ参加

市町村教育委員会と学校長会

東 潮来市教育委員会との連携

潮来・牛堀中 諸星 通哉

潮来市の学校長会は、小学校六校、中学校四校の計一〇校で構成されている。学校長会は、毎月一回の定例会と数回の臨時会を開催し、教育課題解決のための研修会や協議、各校の取組について情報交換を行っている。定例会・臨時会ともに、市教育長と学校教育指導室長が毎回同席し、講話や指導助言をいただいている。さらに、教育施策や事業の確認、各種の情報提供をいただくことにより、各校の学校経営が円滑に推進できるように連携し、潮来市の教育が一層充実したものとなるよう実践を進めている。また、学校長会は潮来市教育委員会と連携しながら、次のような事業を行い、成果を上げている。

一 確かな学力の育成

本市では、四つの中学校区ごとに小中連携を積極的に進めており、小中教員の相互交流や児

童生徒交流、定期的な合同研修会を実施し、小中一貫的教育を推進している。英語教育推進事業では、各中学校一名、小学校二校に一名のALTを配置し、国際化に対応できる人材の育成に努めている。英語教育以外にもTTを積極的に活用し、きめ細やかな学習指導を展開している。潮来市学習指導研究協議会を年三回開催し、よりよい学習指導法の研究を進めている。同時に、毎年二校で研究発表会を開催し、他校の取組を共有して自校化につなげている。二年目を迎えた中学生海外派遣事業では、一〇数名の生徒が台湾でホームステイを経験するなど、国際交流に力を入れている。

二 豊かな心の育成

本市では、いじめ撲滅のために各校とも月一回、いじめをなくすための時間を特設し、独自の取組を進めている。QUTテストを年二回実施し、不登校の未然防止に役立てている。毎年八月に、人権教育研修会やいじめ対策研修会を行い、教育的予防を重視した生徒指導に生かしている。豊かな心育成事業では、様々な外部講師による講話や講

演により、子供たちが新しい目をもち、心豊かに生活していることとする意識が育つようにしている。幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けての研修会も開催され、保幼小の学びをつなぐことを大切にしている。潮来市立図書館との連携も、豊かな心の育成に大きく寄与している。各校の読書環境が整備・充実してきており、子供たちの読書量も増加してきている。巡回図書による本の貸し出しも効果が大きい。

潮来市の学校教育推進のキーワードは「笑顔」である。市内の子供たち全員が、笑顔いっぱい、の学校生活を送ることができるよう、潮来市教育委員会と更なる連携を図っていききたい。

南 石岡市教育委員会との連携

石岡・府中小 島田 稔紀

石岡市の学校長会は、小学校一九校、中学校五校の計二四校で構成されている。「学校経営

の目標を達成するために、市では次の取組を行っている。

- 研修(主なもの)
- 教育講演会(八月)
- 人権教育研修会(八月)
- 生徒指導研修講座(八月)
- 市教育研究発表会(八月)
- ICT研修会(八月)
- 外国語教育研修会
- 特別支援教育研修会
- 教育論文発表会(二月)
- 施策・事業(主なもの)
- 各種学校訪問
- ICT環境の整備(デジタル教科書・タブレットPCの活用)
- ふるさと学習の推進・ふるさと学習サミットの開催
- いじめ防止フォーラム
- 石岡市学校サポートチーム
- 平和大使派遣事業(中学校)

ビジョンの明確化と組織マネジメントの在り方」を研修テーマとし、教職員の勤務意欲の向上と学校活性化、学校経営ビジョンの共有と協働体制の確立、ミドル・アップダウン・マネジメントの推進と人材育成等に取り組んでいる。

一 定例会・教育懇談会

学校長会は、年間十二回の定例会・研修会を開催し、教育課題解決のための研修や協議、各校の取組についての情報交換を行っている。定例会には市教育長と市教育委員会参事が毎回同席し、助言・指導とともに市の教育施策や事業の確認及び各種の情報提供をいただいている。

年度始めの定例会では、市教育委員会事務局職員との顔合わせを行い、各課の教育施策の周知伝達・確認を行っている。

また、例年、六月に市教育委員会との教育懇談会を実施し、学校長会や市教育研究会の取組、各小中学校の具体的な取組について説明し、市教育委員会からの質疑に回答したり意見を頂戴したりして連携を進めている。

二 市の教育施策の遂行

石岡市の教育大綱の基本目標は「ふるさとに学び、夢にはばたく、輝くひとづくりのまち」、市の学校教育の重点目標は「一人一人が輝く活力ある学校づくりを目指して」である。これら

学校長会は、これらの教育施策の教育的価値を踏まえて、各校での積極的に確実な取組を推進している。また、市教育委員会に学校長会としての考えを具申したり、予算要望特別委員会を通して教育環境充実のための確実な予算立てをお願いしたりするなど、教育現場の実状に沿った質の高い教育の実現に向けた取組を進めている。

今後とも市教育委員会との連携をさらに深め、石岡市の児童生徒の健全育成を目指して学校経営に取り組んでいきたい。

特別寄稿



少子化と
人生百年時代の教育

銚田市教育委員会教育長

石崎 千恵子

少子化、人生百年時代にあつて、避けて通れないのが学校統合と新しい学校教育の構築である。

まず少子化であるが、本市においては、小学校統合が計画どおりに進みつつあり、平成二七年度には小中学校合わせて二四校あったものが、平成三二年四月には十四校になった。令和七年度には小学校四校、中学校四校の八校になる予定である。統合により学区が広がり八割弱の児童がスクールバスを利用するようになり、児童数百人前後の小規模校での学びから一学年複数学級の大規模校での学びになった。子供たちは順調に新しい学校になじみつつある。この陰には、行政と連携した教職員のためみない努力と保護者の協力がある。

ではなく、学校運営の特色といったソフト面の在り方が重要である。そして、この特色の中には、校長の経営方針や年度ごとの目標といった短期的なものだけでなく、「伝統」や「校風」といった卒業生、関わった教職員や地域住民の思いが積み重なってできあがっているものもある。これらは、その学校の長い歴史の中で失われることなく脈々と受け継がれてきたものであり、教育活動の様々な場面で、児童生徒の「誇り」という心理的な基盤になってきたものである。

学校統合は、校舎等のハード面の整備だけでなく、今までの心理的な基盤である「校風」を含めたソフト面の構築も迫られる。しかし、これは、ある意味チャンスである。行政は、新しい時代に対応した学校環境をきちんと整備し、教職員は新しい教育活動の在り方を追求する中で保護者とともに新しい「校風」をつくりあげていく。行政と教職員・保護者が連携して、新しい時代の学校の在り方を実現できるチャンスであるのだ。

本市では、小学校外国語の教科化に向け二年前倒しで、小学校へA L T配置を行ってきた。本年度からはプログラミング教育やI C Tを活用した教育の充実に向け、教育現場で実績のある人材をI C T指導員として任用した。市内全普通教室への大型モニター設置と併せ、I C T活用の技術だけでなく、I C Tと教材をどうつなげるかの視点を重視した任用である。

限りある予算の中ではあるが、行政としては、現場の教職員が新しいことに楽しみながら取り組み、資質の向上につなげていけるような支援をしたいと考えている。

人生百年時代を生きる児童生徒が、新しいものや時代の変化に臆せず、学び続け、対応できる力を付ける学校教育にするためにも、教育に携わる者すべてが、それぞれの立場で変化にきちんと向かい合い、対応していくことが重要である。

読んでみませんか

「みんなのなやみ」

著書 重松 清
発行所 新潮文庫
か・下稲吉東小 松信 登

ここ数年間、教育関係の雑誌しか読んでいなかった私に、校長会からの夏休みの宿題が届いた。書店にある「読書感想文に おすすめの本コーナー」。これも夏の風物詩と、暢気なことを言っていたのだが…。

自宅の書棚を探していると、今は三〇を過ぎた息子が高校生に時に読んでいた一冊の本を、見付けた。本の帯には、「なやみの背負い方伝えます。大人も必読の人生相談」と、あった。この本には、「家族」「からだと恋愛」「学校生活」「友だちのこと、いじめのこと」「大人の常識って正しいの?」「親だつてなやんでいる」の七つの章で、子供からの悩み相談に対して、筆者の感想や考えが綴られている。

虐待、いじめ、自殺、あつてはならない教師の不適切な指導。その他、様々な社会問題。ここで、一つの例を考えてみた

感謝。

梅のかおり

—先輩校長から—



ゆったりとした時間を楽しむ



前・常陸大宮市長
大宮小学校長 優
鹿島

退職して数か月。現在、幼稚園に勤務し、純真な園児たちの姿に心が洗われると同時に、多くの感動と出会っています。

時間少し余裕ができたこともあり、今までできなかったことにチャレンジしたいという思いを強く抱いています。そこで、チャレンジしたいことを羅列的に書き出してみました。書き出しながら、ワクワクした気持ちや膨らんできました。現職時代には味わえなかった感覚です。いつかやってみたくて思っていた桜前線を追うことも、一部実現することができました。一つのチャレンジを終えた後は、何とも言えない満足感や達成感

でいっぱいになります。

また、日常の生活の中で、今まで気付かなかったことに出会うことが多々あります。ゆったりとした時間の中で、一つのことをしつかり見ることができるようです。例えば、家の周りの草刈りをしていて、雑草の中に小さなギボウシやサルズベリの芽を発見することがあります。これまで草刈りをしていても見えていなかった草木です。時間のゆとりが心のゆとりにつながる、毎日の生活が充実していることを実感しています。

回想



前・那珂市長
菅谷小学校長 信之

退職時、職員や保護者・児童過去の教え子たちから、心温まるお礼の言葉や手紙を頂きました。もう先はそれほど長くないけれど、一生の「宝」を手にし、嬉しさと同時に、懺悔の気持ちも、自慢できるようなことが思い浮かばなかったからです。

二〇代は「私がルールブック・私が正義」の世界。子供には、私の指示通り動くことを求めて

いました。できて当たり前、できなければ叱るだけ。三〇代は、指導を受け入れなかったあなたの自己責任。子供の言い分を聞こうとせず、褒めることもできませんでした。こんな指導では駄目だと気付いたのは、担任を離れてからでした。

学校で子供に求めていること、例えば「時間を守る、挨拶をする」等々。できて当たり前と思われていること、実は大人でもなかなかできない高度なことなのです。これらができなければ、声に出して相手につたえなければなりません。つまり「褒める」ということです。褒められれば、大人でもやる気ができます。「褒めて育てる」大切さに気付いた頃、私は退職となりました。

新鮮な感覚



前・日市市長
助川中学校長 洋一
鈴木

四月一日、朝。起床時刻は前日までと変わるはずもなく、再任用先の職場へ向かうために身支度を始めた。今日から校長ではない。分かり切ったことを咬きながら、出勤のために玄関を

出た。空は、春には珍しく抜けるような青色、しばらく忘れていた新鮮な感覚であった。

勤務は週四日、火曜が週休日となった。あの日から五か月が経過、週休日に休むことの罪悪感も薄れてきた。最も変わったことは、携帯電話の着信が極めて少なくなったことだ。

当然、自分だけの時間が増えた。積極的に、本屋へ通うようになった。以前からファンであったミュージシャンのコンサートへも出かけた。炎天下、チェーンソウを担いで山へ入れれば、キリギリスの気分になる。愛犬ハチ公の散歩を再開、これまで撰生に縁遠かった私自身の適度な運動にもなっている。お蔭様でかかりつけの医師から褒められるようになってきた。

人生百年時代、これからが本番、地域や社会に恩返しをしなから、毎日、新鮮な感覚を堪能したいと考えている。そのためには、まずは心身ともに確実に健康な二〇年間を目指したい。

豊かな自然の中で



前・神栖市長
やたべ士合小学校校長 靖彦
椎名

たくさんの地域や保護者の方々、そして子供たちや多くの先生方に出会えた三七年間の教員生活に、幕を下ろすことができました。感謝の気持ちでいっぱい입니다。ありがとうございました。四月からは、地元行方市にある白浜少年自然の家を第二の職場としております。着任してから早いもので半年が過ぎ、自然の中で、大勢の利用者の方々に囲まれ、新たな出会いの日々を過ごしています。また、施設の管理という面で、改めて敷地の広さ、自然の驚くべきパワー（草木の伸びる凄さ）を全体で感じている毎日です。これからも、おもてなしの心を持ち、利用者の皆様方が気持ちよく使用でき、思い出に残る体験活動等ができる環境を提供していきたいと思っています。特に体験が乏しい今の子供たちにとって、この施設での出会いを通して、友達への思いやり、協力と団結、物づくりの楽しさ、野外活動等の有意義な体験になるよう努めていく所存です。今までの経験を少しでも生かし、「目配り・気配り・心配り」を心がけて、よりよい人づくりの一助にしていきたいと思えます。

地域への恩返し



前・阿見町立
阿見第一小学校長
和田 和彦

地域の方々や保護者、同僚に支えられ、今年三月、無事に定年退職を迎えることができた。しかも、最後の勤務校は、かつて一〇年間勤務した学校。おかげで、教職生活の約三分の一を当該校で過ごすことができ、感謝の気持ちでいっぱいである。

この退職に当たり、教育長先生から社会教育の仕事を紹介いただいた。それも阿見第一地区での業務とのこと。お世話になった地域の方々に、生涯学習の面から恩返しができるかと思いい、喜んでお引き受けした。阿見町では以前から生涯学習に力を注いでいて、その目玉となる活動が、平成二年度からスタートした「ふれあい地区館事業」である。現在も、小学校区ごとに組織され、多様な町民ニーズに対応した講座・教室、魅力あるイベントの開催など、地区の特性に応じた運営に努めている。私の勤務する地区館でも、「高齢者部会」「青少年育成部会」「成人部会」「女性部会」「体育部会」という五つの専門部会

を組織して活動している。その中で、子供たちや保護者、祖父母等とふれあえることを幸せに感じながら過ごしている。今後も、地域コミュニティ活性化の一助として、ふれあいと交流活動を支援していきたい。

何かひとつ



前・利根町立
利根中学校長
川村 由紀夫

「何かひとつだけでよい。誰にも負けない得意なものをもちなさい。もしもつことができたなら、そのことは自分自身の大きな自信と力になります。」これは数々の教え子たちや若い教員の皆さんに向けて言ってきた言葉です。私はとうとうこ

れまで五〇数年間書道が続けています。元々私の父親が師範というところもあり、小さな頃から親しんでいました。ご多分に漏れず身内が師匠というのは遠慮がないもので、いつも「下手だとか書き直し」ばかりで随分書くことに実は長い間、劣等感があつたのも事実でした。しかし、教員になった頃から「何かひとつ」の言葉を伝えるようになって、自分には書道が

あると思うようになり、続けることで自信になったのです。これまで、歴任校の卒業証書や表彰状、統合校の表札、校歌の歌詞、書道展の作品など様々なものを書いてきました。現在、新たな師匠に付いて書道を学び直しています。今の目標は文部科学省後援の「毛筆・硬筆書写技能検定最高位の一級合格」です。書道は奥が深いものです。まだまだ我が未熟さを感じるこの頃、「何かひとつ」を身に付けるべく精進する日々は充実しています。

旧交、あなたためよう！



前・坂東市立
第一小学校長
岩井 美由紀

四〇年ぶりに私の手元に戻った「愛するということ」エーリッヒ・フロム。本好きとはいえない私が、赤線を入れ、独り言を書き込んだ。高校時代の親友に無理に貸し付けたものだった。二〇代の終わり頃「大事な本なのでいつでもいいから返して」と伝えてあつたが、その後私の記憶からは遠のいていた。

還暦祝いの同窓会に、彼女は本当に申し訳なさそうに「返して」って言われていたのに「めんね。」と当時と大して変わらない状態の本を差し出した。大切に保管してくれていたことが一目でわかり、黄色の表紙で一気に記憶がよみがえった。もし彼女の手元になかったら、この本を私が再び手にすることはなかっただろう。いつも一緒だった大好きな友とお気に入り本（理由は忘れた）が目の前にある。近年味わったことのない種類の嬉しさと涙が、じわりとわいた。

後日、定年を労う手紙が彼女から届いた。「天職を全うしたね。」うれしくて涙があふれた。ほぼ年賀状だけつながっていた細い細い縁だが、私の人生をずっと支え見守ってくれていたのだ。一冊の本を時空をこえて今によみがえらせてくれたように。また、久しぶりに昔話をしながら、ランチを楽しもう。

退職後をどう生きるか



前・桜川市立
桃山園校長
和田 和彦

多くの皆様に支えられ、お陰様で三八年間の教職人生を無事全うすることができました。

現在は、新たな勤務地で若い先生や子供たちと過ごしながら、これまでの経験を少しでも活かそうと取り組んでいます。ところで、退職する際、ある先輩から、「これからの第二の人生を生きていくのに何が必要か。」と問われました。急に問われた私は、まずは「健康」が第一かなと思いました。

しかし、予想に反して先輩は寺島実郎著『ジェロントロジー宣言』「知の再武装」で百歳人生を生き抜くを紹介されました。先輩はこれからの高齢化社会のなかで「百歳人生」を迎えることになる。そのため「知の再武装」を実践しようと心がけていると話されました。退職後は、これまでできなかった畑の世話と趣味をしようと思然と考えていた私は、先輩の言葉に叱咤激励された思いでした。

著書には、高齢化社会が進行するなかで、高齢者が積極的に生きる力をどのようにつけていけばよいか提起されています。元号も令和に変わり、社会も大きく変化するなか、私も自分の生き方を改めて見つめ直し、社会の一員として少しでも関わっていかれたらと考えています。

著書には、高齢化社会が進行するなかで、高齢者が積極的に生きる力をどのようにつけていけばよいか提起されています。元号も令和に変わり、社会も大きく変化するなか、私も自分の生き方を改めて見つめ直し、社会の一員として少しでも関わっていかれたらと考えています。

ひばり



「3年目のコチヨウラン」
常陸太田・金砂郷小 武石 洋

地域のまつりと学校

水戸・堀原小
河原井 信幸

今まで勤務した学校には、必ず地域のまつりがあった。そして、管理職という立場で地域のまつりに参加したとき、今まで抱いていた考えが変化した。地域にとって、学校は子供や保護者を介して重要なコミュニケーションの場であることを痛感する。様々な会合に参加し、学校の様子を伝え、お互いに協働して活動をしていく。地域ごとにもまつりの催し物の内容や活動に差はあるものの、唯一、共通し

ているものは、「学区の子供たちのため」であった。まつりに参加している方は、実にいい笑顔をしている。

管理職として、同一校に勤務できる期間は、わずかである。まつりの準備・運営・片付けまで関わり、その地域の方々の協働を通して、地域を理解し、学校の教育活動にも協力をお願いしていくことが大切である。今年の四月より、水戸市は市内全公立学校で学校運営協議会制度がスタートした。多くの合議を重ねながら「地域とともにある学校」づくりを推進していきたいと思う。

あいさつで心をつなぐ

笠間・友部二中
大関 修

先日、付近にお住まいの方から封書が届きました。「散歩をしていたところ、部活動をしてきた生徒から丁寧なあいさつをされた。登下校中の生徒からのあいさつも大変うれしく思っている。」と書かれていました。

本校の生徒が、社会を明るくすることに関わっていることに感激するとともに、日頃の教職員への指導に感謝しました。本校生徒会は、以前から駅前でのあいさつ運動を学区内の小学校や特別支援学校と連携して行っています。そのとき、子供たちには「あいさつは短い時間ですが、大切なコミュニケーションです。声の調子で相手の気持ちや体調が分かります。目を合わせるとあいさつすると、それがもつと感じられやすくなります。言葉をもつていない生き物でさえあいさつ（コミュニケーション）を交わしているのですよ。」と話しています。子供たちは目を輝かせて聞いてくれます。今後ともあいさつの輪が大きく広がってくれて、地域社会が明るくまとまってくると大変うれしいです。

「伝統」は引き継ぐだけでなく、自ら築き上げるもの

常陸太田・金砂郷中
菊池 浩之

金砂郷中学校は、常陸太田市の西側に位置し、北中学校と南中学校が統合してできた、創立五年目の新しい学校です。四月に赴任して、生徒たちの姿に、たくさんの感動をもらいました。

まず、あいさつです。ほとんどの生徒が相手の顔を見て元気な声であいさつができます。次に、学校行事への意欲的な参加です。本校の特色として、学校行事では実行委員を募って運営しますが、全校生徒の半数近くが実行委員に立候補します。自分たちの力で企画・運営し、行事をつくりあげていきます。そして、高い勤労意欲です。清掃活動や奉仕活動の時間、誰一人として手を抜く生徒がいません。一人一人が額に汗し、ひたすら活動に取り組みます。誇れる金砂郷中生の姿がそこにあります。新しい学校での確かな伝統が生徒たちの手によって築き上げられていることに喜びを感じます。今後、生徒の手でたくさんの伝統が築けるよう、教職員一丸となって支援して参ります。

世界のカシマ

鹿嶋・波野小
内野 輝彦

学校から東へ一キロメートル程行った明石の浜にひっそりと立つ鳥居がある。常陸國一之宮鹿島神宮の東の一之鳥居である。昔、ご祭神である武甕槌大神が降臨された場所と伝えられている。この一之鳥居から西に鹿島神宮、皇居、明治神宮、富士山、伊勢神宮、吉野山、高野山、剣山、高千穂へとほぼ一直線に続いているため「すべての始まりの地」と言われ、最近では、パワースポット巡りと称して、訪れる人もいるようである。

また、学校から西に五〇〇メートル程行ったところには、カシマサッカースタジアムがある。平成四年、このスタジアムでジーコという「サッカーの神様」が躍動した。その後、ワールドカップ開催、ACL優勝、東京オリピックのサッカー競技会場となり、カシマという名が世界にも知られるようになった。これからも、鹿嶋の歴史を伝承し、「ジーコスピリット」「献身・誠実・尊重」を受け継ぎ、日本の鹿嶋から世界のカシマを目指して、最高のおもてなしを子供たちと共に考えていきたい。

「弱み」と「強み」は裏表

かすみがうら・上佐谷小
藤田 雅久

本校は全校児童数三四名で、豊かな自然に囲まれ、長くこの地域に暮らしている方が多い地域の学校です。そのような学校に、私は本年度赴任しました。

前任校は、全校児童数が四百数十名の、住宅街に位置する学校だったので、はじめはその違いに少し戸惑いました。

しかし、その戸惑いはすぐに消えました。それは、愛すべき子供たち、そして歴任の校長先生を中心に、これまでの先生方が築き上げてきた確かな教育実践のおかげです。

本校は児童数が少ないため、切磋琢磨しにくい、人間関係が固定化しやすいという面があります。しかし反面、温かな家庭的な雰囲気は溢れています。また、歴史のある地域なので、保守的な面はありますが、学校に深い愛情をもって協力してくれる方がたくさんいます。

本校では、そういった「強み」にフォーカスした、児童一人一人を大切に、地域の人材や自然など、身近な教育資源を積極的に活用する教育活動が盛んに行われています。「弱みと強みは裏表」。今、そのことを改

めて実感しています。私も、本校の特長を大切にしたい、本校らしい教育を推進していきたいと思っています。

令1グランプリ

つくばみらい・伊奈東中
豊嶋 俊彦

人口増加著しい本市にあつて、本校は市内一の小規模中学校です。部活動の再編も急務で市の総体ではサッカー部が七人で戦いました。結果が見えていても全力を出し切る生徒に感動しました。清掃時間に膝を着いて床を拭く姿など、本校には感動のシーンが至る所にあります。

一方で、結果の前に諦めてしまっている生徒が少なからずいる実態があることも気がかりです。

そこで、令和を機に、令1(レイワン)グランプリを始めました。これは誰でもやればできる頑張りを表彰する、本校の課題にフォーカスした取組です。

一学期は、月曜朝のあいさつボランティア部門、ノートの個人差解消を目指したノート部門等を設けました。あいさつ部門では、対象となった日は六回ありました。その全てに参加した生徒もいました。

一学期終業式で、全生徒の約

四分の一に賞の缶バッジとコースターを授与しました。その喜ぶ姿を見て、これからも生徒の目を輝かせる作戦を練っていきましょうとの思いを強くしました。

地域とともに

猿島郡・森戸小
辻野 博勝

本校は、創立一三八年の歴史を誇る地域と結びつきが深い学校である。地域の方々の思いを大切に、郷土愛、地域から愛され、地域を愛する子供たちの育成を目指し、地域素材を生かした体験活動「稲作体験」や「福祉施設との交流会」「さしま少年自然の家」での自然体験などの行事を実践している。

春には、ソメイヨシノ、八重桜が見事な花を咲かせ、夏には校庭の花壇にサルビアやマリゴールド、朝顔、ひまわりの花が、秋になると銀杏が紅葉し、大きな胡桃の木も実を付け、冬にはパンジー、ピオラ、サイネリアなど、四季折々の姿を見せ、自然豊かである。

本校には、もう一つの地域自慢がある。それは「ホタル放流体験」だ。豊かな自然を守っていききたいという地域の人たちと、自分たちの住んでいるふるさとについて学びたいという子供たち

ち、郷土を愛する子供たちを育てたいという学校、三つのニーズが一つになって行われている。もう一〇年以上続いている。

三年目の校長として

古河・第三中
櫻村 睦彦

私は、自宅から片道約一時間かけ車で通勤しています。しかし、会合等の関係で月に数回電車で通勤することがあります。その際、古河駅から十五分かけて徒歩で本校に向かいます。その途中、元氣よく「おはようございます。」と挨拶をし、自転車ですぐの横を過ぎて行く生徒や笑顔で挨拶をし徒歩で登校している生徒に出会います。生徒の声を聞くことも爽やかな気持ちになります。さらに、自転車で一列になって左側を走行している生徒たちや一時停止をし左右確認をしている生徒など、交通マナーをきちんと守っている姿も見かけます。このように学校外でも生徒のよさに触れることができず。また、学校へ向かう道を変えようと「こんなお店があるのか。」「この通りは危険だ。こんな危ない場所を通学しているのか。」など、いつも車で通り過ぎてしまうと見えな

い、「ハッ」とし「ホッ」とす

編集後記

大風による大水害により、被災された地域、学校の皆様からのお見舞い申し上げます。今号は、「特色ある学校経営」、「先輩と語る会」等の特集として掲載いたしました。貴重な原稿をお寄せいただきました皆様に感謝申し上げます。また、私たちに応援と激励のお言葉をいただきました先輩の皆様のご健康とご活躍を祈念いたします

